

ほとけさまからの呼びかけ

澁谷 由美

深きみのりにあいまつる
身の幸ななにたとうべき
ひたすら道を聞きひらき
まことのみ宗ただかん

お寺で何か集まりがあるとき、はじめに歌われる「真宗宗歌」の歌詞です。「真宗宗歌」は、「真宗」の「宗」(むね)をあらわした歌、ということになります。むね、ですから、真宗の根本となる教えが表現されたうた、ということです。歩みの姿勢が示された歌、とでもいいでしょうか。

歌、といえば、随分前にこんなことがありました。イタリア語の歌のレッスンを受けていたときのこと、先生にこのように指摘されたのです。「君の歌は非常に日本人的だね。神様！という叫びが内に内に向かっている。もっと、神様一！と、外に向かわなきゃ」

よく、外国の方が喜んだり驚いたりする姿を目にしたとき、そんなオーバーな、、、と思ったことはありませんか？ ちょうどあんな感じに歌うべき、とおっしゃるのです。

神様は「向こう側」におられるから、その「向こう側」に感情が向かうのだ、と。歌詞に込められた情感は、向こう側におられる神様に向かって外へ外へと表現されるべきなのに、私の歌は内に内に向かっている、という指摘でした。この、とても面白く興味深い指摘は、今でも強く印象に残っています。

では、南無阿弥陀仏、お念仏はどうなのでしょう。「神様一！」と、むこう側にいる神様に向かって叫ぶように、「阿弥陀さまー！」とこちら側からの声がけなのでしょう。「南無阿弥陀仏」はわたしの口から発せられます。しかし、お念仏は「なにをしておるか。大丈夫か」という、ほとけさまからの呼びかけ、といわれます。わたしの口をついてでるお念仏ですが、わたしの耳に届く時、それはほとけさまからの呼びかけなのです。そして、ほとけさまは決して「向こう側」などにはおられないと気づきます。ひたすら道をききひらきながら、まことのあゆみをいただくのです。